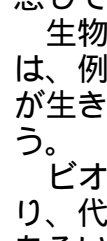


木の岡ピオトープってなに？

ピオトープとは



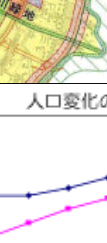
先生、木の岡ピオトープの「ピオトープ」って何ですか？

ピオトープはギリシヤ語で「bios」（生物）と「topos」（場所）の合成語で、一言でいえば生物が生息している場所のことじゃ。生物が生息している場所であると言っても、それは例えば人間による管理や手助けのもとで、熱帯魚が生きているアクアリウムのような場所とは意味が違う。ピオトープというのは、生物が自分の力で栄衰をとり、代謝し、成長し、必要に応じて寝れ、眠り、移動あるいは越冬し、子孫を生み、育て、「種」を維持していくことが保証されている。空間または環境のことじゃ。（「生きものの水辺 桜井善雄著 新日本出版社」）



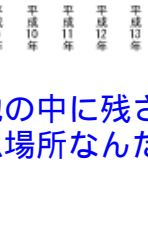
なるほど・・・それじゃあ、木の岡ピオトープってどこにあるの？

木の岡ピオトープは、琵琶湖（南湖）の西岸、大津市木の岡町にあるんじゃ。下図は木の岡ピオトープを取り巻く環境じゃ。

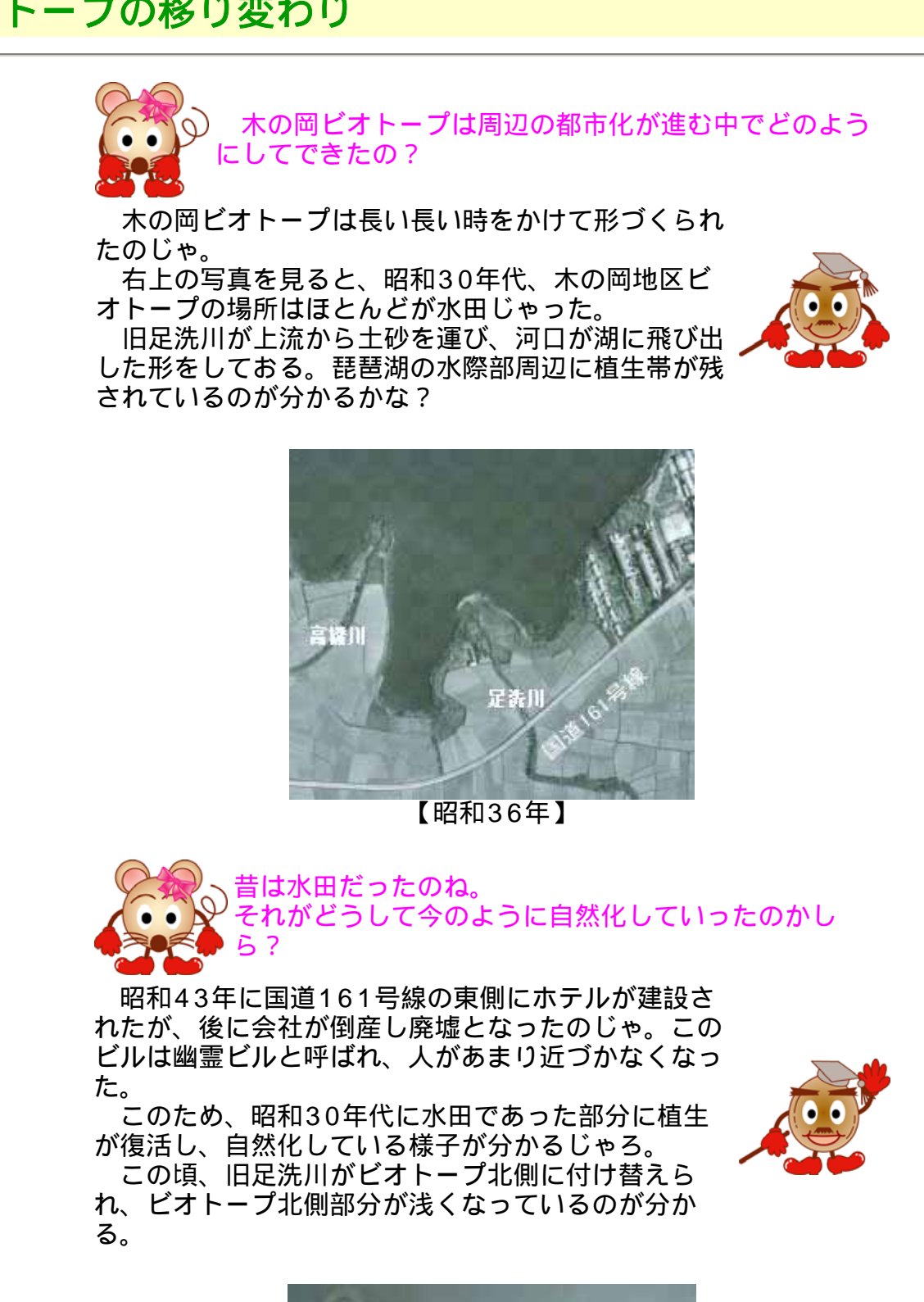


木の岡地区ピオトープは工業地域に囲まれているんだね！

そうじゃよ、下のグラフを見れば分かるように琵琶湖の南湖周辺は人口が増加しており、水田が減り宅地が増えている。その中で、木の岡ピオトープは様々な生物のすむ良好な自然環境が残る貴重な場所なのじゃ。



【木の岡ピオトープ周辺における都市計画状況】



ピオトープの移り変わり



木の岡ピオトープは周辺の都市化が進む中でどのようにしてきたの？

木の岡ピオトープは長い長い時をかけて形づくられたのじゃ。右上の写真を見ると、昭和30年代、木の岡地区ピオトープの場所はほとんどが水田じゃった。旧足洗川が上流から土砂を運び、河口が湖に飛び出した形をしてる。琵琶湖の水際部周辺に植生帯が残されているの分かるかな？

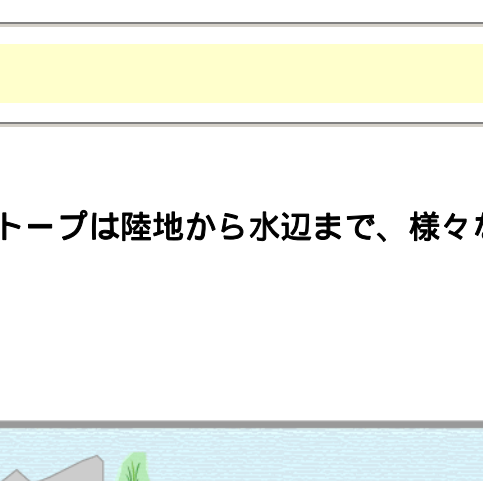


【昭和36年】



昔は水田だったの、それがどうして今のように自然化していったのかしら？

昭和43年に国道161号線の東側にホテルが建設されたが、後に会社が倒産し廃墟となったのじゃ。このビルは幽霊ビルと呼ばれ、人があまり近づかなくなった。このため、昭和30年代に水田であった部分に植生が復活し、自然化している様子が分かるじゃ。この頃、旧足洗川がピオトープ北側に付け替えられ、ピオトープ北側部分が浅くなっているの分かる。



【昭和48年】

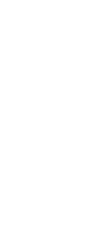


廃墟となったホテルがあったので、人が近づかなくなって、自然があるべき形に変化していったの。

そうじゃ、昭和50年代には、旧足洗川河口の付け替えによりピオトープ北側の土砂が堆積した場所が大きな植生帯となっている。廃墟となったホテルより琵琶湖川の部分は人が入らないことから、どんどん自然化が進み、大きなヨシ帯が形成され、その背後には大きなヤナギ林が形成されたのじゃ。

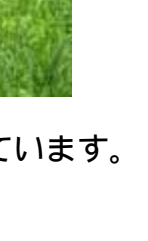


【昭和59年】



平成4年にはホテルが撤去され、跡地は草原となった。また、ピオトープ南側には新大宮川が建設され、木の岡ピオトープの周辺環境は変化してきた。

長年に渡り人が立ち入らなくなったことなどから、良好な自然環境が残っているが、新大宮川の運用開始等により、今後も植生が変遷していくことが予想される。



【平成12年】

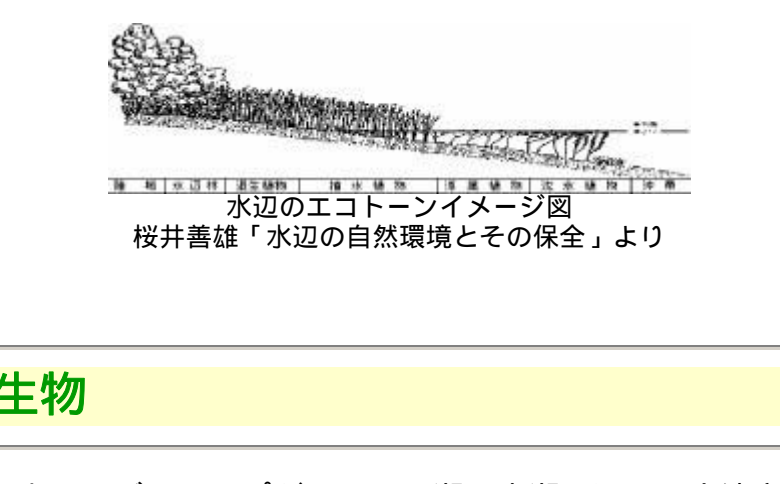
ピオトープの環境



木の岡ピオトープは陸地から水辺まで、様々な環境が混在しています。



ゾーン1



連続する水辺植生群落がエコトンを形成しています。

ゾーン2



足洗川を含めた水路がまばらな湿性ヤナギ林内を流れています。

ゾーン3



湿性ヤナギ林内であり、旧足洗川の流路沿いに形成されたことから、上流にしか生育しない植物が部分的に生育しています。

ゾーン4



湾状になった部分であり、水深が浅く夏季には沈水植物が繁茂しています。

ゾーン5



一旦更地化された跡に成立した二次草原です。

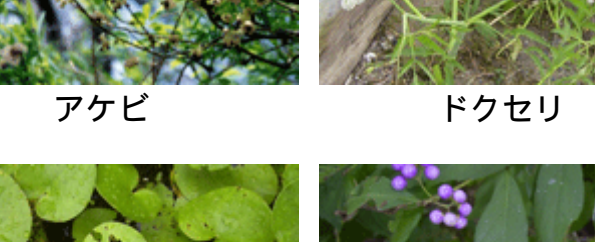
ゾーン6



湿性植物環境が形成されていますが、大宮川水路運用後は堆積した土砂とともに押し流される環境です。

エコトーンとは？

自然の水辺には、水辺特有の植物が生息しています。これらの水辺に付く植物は、水中と陸という性質の異なる環境をゆるやかになく「エコトーン（移行帯）」としての役割を果しています。水辺のエコトーンは、湿生植物（湿地に生育する植物）や抽水性植物（水から茎や葉を突き出すように生育する植物）等、その水辺空間の環境条件に合わせて様々な植物によって構成されます。



桜井善雄「水辺の自然環境とその保全」より

ピオトープの生物



木の岡ピオトープがある琵琶湖の南湖周辺は、大津市や草津市など都市化が進み、いろいろな生物のすみ場がどんどん減っています。そんな中で、木の岡ピオトープは、さまざまな生物のすみ場があり、南湖でも有数の自然豊かな場所となっています。

木の岡ピオトープでは、植物が約340種、付着藻類が約70分類群、哺乳類6種、鳥類が約60種、両生類・爬虫類11種、昆虫類が約410種、魚類12種、底生動物が約60種もの生きものが確認されています。（滋賀県土木交通部河港課調査H15）

植物：約340種



オニグルミ

ヤブラン



サデクサ

オオマルバノホロシ



アケビ

ドクセリ



トチカガミ

コムラサキ

昆虫：約410種



ショウジョウトンボ

セスジイトトンボ



アオスジアゲハ

セミの抜け殻

鳥類：約60種



アオサギ

キンクロハジロ



カイツブリ

トビ

両生類・爬虫類：11種



ミナミイシガメ

トノサマガエル

シュレゲールアオガエル

哺乳類：6種

ホンドタヌキ

カヤネズミの巣

カヤネズミ

魚類：12種

ドジョウ

ゲンゴロウブナ

キギ